

# 野鳥たより

—北海道—

ISSN 0910—2396

第 110 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成 9 年12月21日

マミチャジナイ



1997. 5. 13 西岡水源池公園 撮影者 尾田 和 夫

〒 062 札幌市豊平区平岸 7 条17丁目 5 - 24



# もくじ

秋、コムケ湖畔探鳥雑記	井上 公雄	2
野幌森林公園 休養園地の鳥類 (平成9年)		
—— 野幌森林公園休養園地 鳥類調査 (春季～夏季) 報告書 ——		
	富川 徹	7
札幌市とその周辺における最近のツバメ事情		
	樋口 孝城	12
探鳥会ほうこく		14
探鳥会あんない・鳥民だより		18

## 続・秋、コムケ湖畔探鳥雑記

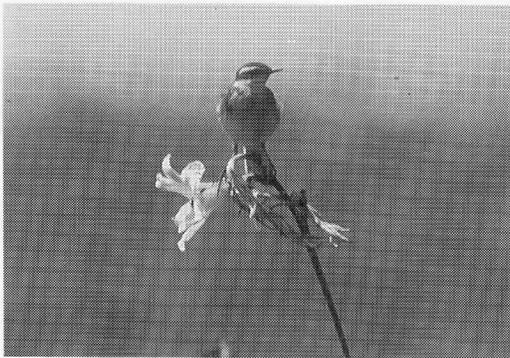
'95年9月15日～17日 (金～日)

井上 公雄

連休を利用、誘い合わせた森田さん栗林さん私の3人で5年振りのコムケ行きになった。

高速道路から見渡す空知の穀倉地帯は黄金色に色付きはじめ、上川盆地の稲穂の垂れる田園地帯の続く中、大雪山系の山並みが秋晴れに聳え立ち遠く十勝連峰へと連なる風景が続き、変わり行く景色をあきることなく楽しみながら目的地へと向かった。

中渚滑から丘陵地帯を経て紋別市街外れで国道へ、暫く行くと左手にブルーの下地に白鳥が飛ぶ姿の「白鳥の



キマユツメナガセキレイ

湖」入口の立て看板が懐かしい。二軒目の農家の畜舎付近のデントコーン畑に戯れるカワラヒワ、ノビタキ、オオジュリン、アオジ、ハクセキレイの小群が見られ、その中に黄色の目立つセキレイが混じっていることに気が付いた。

こんなところにキセキレイが?早速図鑑を調べてみると思いがけないキマユツメナガセキレイであることが分かった。共和橋付近から中沼を見る。カモ類、アオサギに混じって白く大きなサギが一羽、車中からダイサギだろうと見過ごしてしまったが、実は珍鳥のヘラサギであることが後で分った。

小沼地区の砂丘に鳥見の車が3～4台駐車している。なぜかこんな所にパトカーが来て私達と入れ代わった。

海岸を見ると3m余りの乳白色の物体が横たわり時々物珍し気に人々が集まり眺めて行く。

役所の人によるとクジラが打ち上げられているとの通報で漂着物として処理のため重機を手配中とかで、休日のため処理が遅れ終わるまで見張っている状態とのこと、パトカーもそのための出動とわかった。

小沼を見渡すと小沼Cを中心に沢山のシギチが右往左往、湖岸ではカメラを構える人、観察する人が5～6人来ていた。近づいて行くと見知らぬ熟年夫婦とカメラを構えた会員の関口さんと若いカメラ仲間であった。

目の前はトウネン、メダイチドリ、ハマシギ、アオアシギ、オグロシギ、オオソリハシギと5年振りに見る相変わらず沢山のシギチに興奮する。

どこかで私達の来たのを見ていたものか共和橋の方向から道川さんが来て早速カラフトアオアシギの居所を教えてくれた。

前日羽田さんからのコムケ情報で大体の居所や見分け方のポイントは聞いていたが、到着早々でもありさあ一探そうかと思っていた矢先だけに有り難い。

これは小沼Aのうつらなヨシ原の中において、ゆっくり歩きながら地面を突ついたり、よしの茎を噛んだり、トンボを採ったり、近くのアオアシギに比べ静かな行動で、脚首嘴が短く全体にややぐりと小さめの感じ、主な繁殖地はサハリン南部だが、カムチャッカ半島、オホーツク海沿岸での記録もあり冬は中国南部、マレーシア半島、インド等へ渡り越冬する。世界的に固体数が少なく国内では旅鳥としてまれに記録されている。

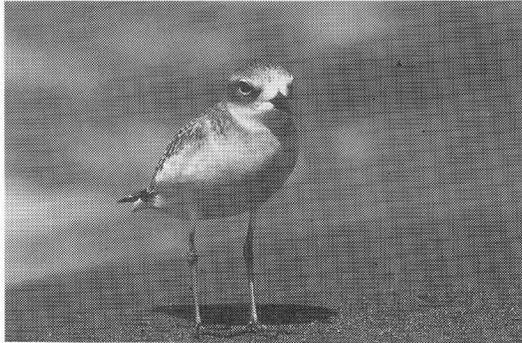
この度のコムケ行きに合わせる様にこの稀少種に出会う幸運に恵まれたが、活発な動きが見られなかったのが少し気掛かりであった。

この周辺ではトウネン、メダイチドリ、ハマシギ、ダイゼン、ツルシギ、オグロシギ、オオソリハシギ、小沼Bではカワセミ、周辺の湿地にはキマユツメナガセキレイも見られた。

この年は小沼Bの斜面と小沼Dでシギチのバンディングが行われ、多くのトウネン、メダイチドリ、脚に青いテープが目立った。

中沼へヘラサギを見に行く。共和橋から200m程の水面にカモ類（主にオナガガモ）の群れ、アオサギの集団の中に白く目立つ一羽が見られた。スコープを向けると背中に嘴を突っこみ風に羽を逆立て休んでいる姿はお世辞にも褒められる姿ではない。（素直な感想）

この手前にオグロシギとオオソリハシシギが約40羽程が嘴を背中に乗せるようにして休息中であった。



メダイチドリ

どうやらこの時間帯は休息の時間か観察には不向きな時間でもある。

しかし道内では滅多にお目にかかれぬ珍鳥なればこそその注目。名前由来になっている嘴先のへら状を見せて貰いたいと願いながら見ていると、思いが通じること大儀そうなくさではあるが、黒褐色の平たく広がったへら状の特徴的な嘴を見せてくれた。

アオサギ、ダイサギに比べ明らかに体が大きくスマートさは見劣りするが写真等で覚えのある特徴的体型、図鑑等によると先が変色し嘴が褐色で目先につながっていることからヘラサギであることがわかった。

国内では主に冬鳥として渡来、沼沢地、干拓地等の浅い水辺に生息、浅水中で嘴を左右に弧をえがく様に動かしながら開閉し小魚、エビ、カニ、昆虫等を採食する。1958~60年に出水市のツル渡来地に45羽以上の群れで渡来したこともあったが、全国的に不定期散発的に迷行が記録され本道での記録は少ない。

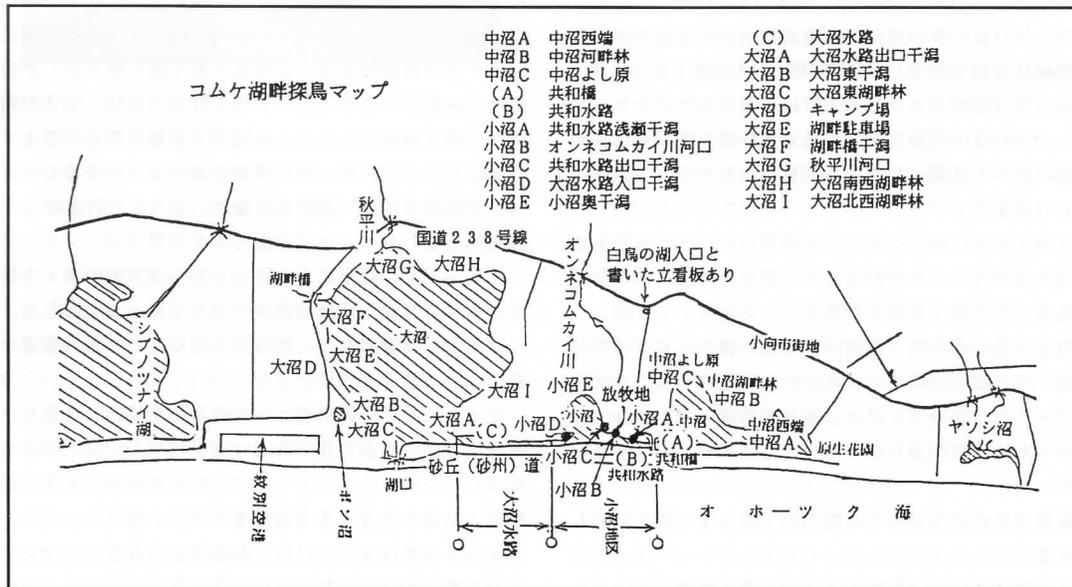
この鳥は95年8月20日会員のH.Sさんが小沼Dで発見したもので（それ以前という未確認情報もある）コムケの各沼を点々と移動し8月20日から9月24日まで観察確認されていることから30数日の滞在になった訳で、この間観察、写真撮影にコムケを訪れた人も多かったことと思う。

久しぶりに大沼へ行って見る。以前は大沼AからFにかけての広い干潟にも沢山のシギチがついたものだが、どうしたのか最近はこの辺りで見られるシギチが少なくなったと聞いており、この日も大沼F付近に3~4羽のオグロシギと大沼Gに7~8羽のシギの動きが見られたが遠くてスコープでも種類の確認は難しかった。

その手前近くの流木にオジロワシの若鳥が一羽止まっているのも見られた。

湖岸駐車場付近のヨシ原雑草の中にはノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ等が集まり草茎を揺り動かし、近くからベニマンコの鳴き声も聞こえて来た。

シブノツナイ湖及び付近の海岸へも足を延ばしてみたがアジサシの群れ以外は取り立てる程のこともなく、初



めての森田・栗林両氏の周辺地域の案内に終わり再び小沼に戻った。話題のカラフトアオアシシギは相変わらずの場所から離れようとしめない。小沼A～Cにかけて集まったトウネン、メダイチドリ、ハマシギの群れの中にバンディングされ足に青色のテープが付けられたトウネンが4～5羽、少数でしか見ることのない珍しいヘラシギも観察された。

ヘラシギは体型大きさともトウネンに良く似ているが嘴の先が幅広くへら状になっているのが特徴、餌を探るときこきぎみに首を振るのが見分けのポイントになった。

小沼B付近の湿地帯ではハクセキレイ、キマユツメナガセキレイが追いつ追われつつ戯れ、カワセミも姿を見せダイビングを繰り返し見せてくれた。

夕焼けとともに辺りは薄暗くなって来た。そろそろ引き上げようかと車に戻った。

### 95年9月16日(土) 快晴

第2日目、何処までも晴れ渡った快い朝、国道からコムケ湖への農道へ入る。間もなく畜舎側の堆肥場にムクドリ、ハクセキレイに混じり朝日に照らされ美しい姿のキマユツメナガセキレイが十羽余りが飛び跳ね、追いつ追われつつ戯れるもの、堆肥の積まれた凹凸を動き回り中から何かを取り出したり、飛び出す羽虫を飛び跳ね捉えたり活発に動き回っていた。折からの朝日に照らされウグイス色にたたんだ羽縁の灰白色に、眉班、下面全体の黄色の鮮やかな美しさとスマートなスタイルに思わず感嘆の声が漏れた。

昨日から度々見掛けてはいたがまじかにじっくりと見るのは初めてであった。

此の種を私が意識したのは'88年(昭和63年)でこの年の5月会員の竹内氏が当別町石狩川公園付近の河川敷の雪融け湿地で観察、証拠的に撮られた写真を見せて貰ってから「野鳥だより」第73号に珍鳥として紹介されている。当時は出現観察記録も稀で鳥仲間の間でも珍鳥の範疇にあって話題になり、是非見たいものだと願望と関心も高まっていた。

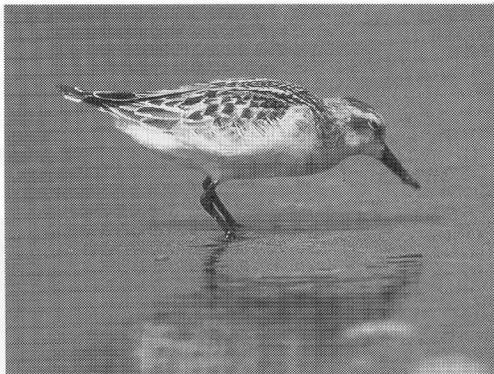
本種を確実に観察となれば繁殖期のサロベツ原野まで出向かなければならないところ、この日は畜舎側の堆肥場及びその付近に十数羽が群れ、ハクセキレイも混じって対比させながら時々仲間同士で追い回したり、飛び跳ねたりして戯れ採餌する行動を存分に観察することが出来た。これは繁殖期を終え、渡りの時期を迎え移動中のものらしく、数回訪れたコムケでも出会ったのは初めてであった。

敏捷で活動的な行動等が魅力的でいつまで見ても飽きない。

この種はサロベツ原野や道北の一部で繁殖しているこ

とは知られているが、他では滅多にお目にかかれない。

共和橋付近から中沼を見る、鏡のような静かな湖面に珍鳥ヘラサギは前日と殆ど同じ場所に休息のポーズで佇み、時折り特徴のへら状の嘴を見せる程度で餌を探る様



ヘラシギ

子もない。小沼では既に渋谷さん夫妻、関口さんと同行の若者(松野君)が観察をはじめていた。

昨夕に比べシギチの数が目立って少ない。好天に乗じて渡って行くのではとの予想が的中した結果は寂しいが、カラフトアオアシシギが昨日とほぼ同じ場所に残っていたのは幸いだった。

小沼B～Cのトウネン、メダイチドリ、ハマシギ等30羽程の中に、昨夕のヘラシギとウズラシギを懸命に探したがついに見当たらないのは残念であった。

十数羽のオグロシギ、オオソリハシシギ、3～4羽のアオアシシギ、20数羽のトウネン、メダイチドリ、ハマシギの群れが、しきりに離合集散を繰り返し小沼A～Eの各ポイントへの移動を重ね、時には一団となって何処かへ飛び去ってしまうのかと思っていると、いつの間にか戻りその間幾度となく急反転上昇下降を繰り返しその都度一瞬花びらを撒き散らす様な群れの飛翔の変化が面白い。海上湖面すれすれの超低空で着地態勢かと思えば一瞬にして方向転換、更に飛翔を続けるシギチ特有のスピード感ある飛翔は躍動感に溢れ、そうした行動はシギチを見る楽しさの一つでもあるように思う。

此処小沼での観察にも一区切りをつけ大沼の様子を見てからサロマ湖、能取湖方面へ行って見ることにした。

昨夕から一緒になった松野君も同行したいとの希望で後について来ることになった。

先ず大沼湖畔の駐車場から大沼全体を見回して見たが所々にアオサギが点在するだけで目当てのシギチの姿は見当たらない。少しばかり休憩した後渋谷さん夫妻、松野君、私達3名計6名3台の車で出発となった。

1泊2日ではコムケ以外に身動きが出来ない。今回は2泊3日、中日の余裕からの遠出になった。

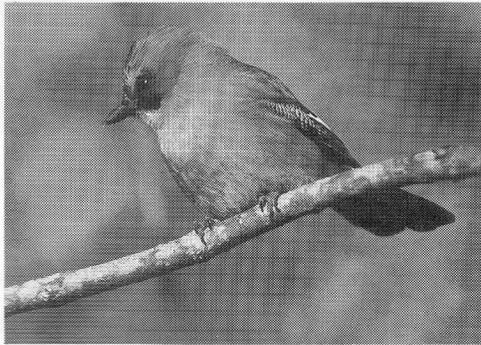
サロマ湖へは幸い渋谷さん、同行の栗林さんが案内役になり鳥見と観光を兼ねた気持ちで行くことになった。

先ずサロマ湖西岸千鳥ヶ浜サング湾のサング草の群生地へ行く。丁度見頃の時期なのでさぞ賑わっているだろうと思って行くと意外にも閑散としたもの、それもその筈奥まった湾内の干潟は曾てサング草の群生地だったのだろうが、今は黒褐色のただの干潟に変わり残ったサング草の成育も悪く、多くの観光客を引きつけた真っ赤な絨毯の期待も見事に外れ次第に観光地としての魅力を失いつつあるように思えた。シギチの着きそうな様相ではあるがアオサギ、マガモが各1羽のほか、鳥かげはない。

20数kmのサロマ湖畔の側道の中でシギチを見るポイントが何箇所かあったがシギチの姿はなく、ヒシクイが渡って来ているという情報もあったが姿は見当たらない。

道のりは佐呂間町から常呂町へ入る。海を見渡す小高い駐車場でひと休み、下を見ると常呂川の河口を利用した公園地が、山側の上には立派なタワーが見えた。

案内図によると森林公園内の百年記念塔であることが分かり立ち寄って見ることにする。国道から山側へ入ると間もなく正面には立派な記念塔が建っていた。



カケス

百段の階段を登ると展望台である。展望台に立つとオホーツク海が一望され山側は森林公園となっていた。

北がオホーツク海、西がサロマ湖、その手前が河畔公園、南が丘陵の森林地帯と箱庭を見る様な心地良い風景にすっかり観光気分になってしまう。

暫く眺めていると林を渡り飛んでいく20羽程のカケスが展望台の上から見下ろされた。秋の渡りの時期だから見られるものか、これ程のカケスの群れを見たのは初めてである。高い所からの眺めは気持ち良い。

一時の観光気分を味わいながら再び国道へ戻り、暫く走ると能取湖が見えて来た。

湖畔の駐車場からシギチの着きそうな広い干潟を見渡して見た。近くには何もいないが、左手の奥の方には大型のシギの群れらしいものが、かげろうに揺れ動いてい

るのがスコープで分かる。これを確認のため今来た国道を戻り湖畔の町道へ入る。凡その見当をつけ車を降り湖畔の草地を掻き分け岸辺へ向かった。

間もなく湖面が見える所まで来て大型のシギらしきものはヒシクイであることが分った。遠い内は我々の動きも気にしない様子であったが、近くなるにつれ一斉に首を伸ばし警戒を見せ始めた所で足を止める。

サロマ湖にヒシクイが渡って来ていることを前日聞いて少数のはしりだろうと思っていた矢先である。

この40羽余りの一群はいつ来たのか不明だが既にこの時期ヒシクイの渡りが始まっていることを確認することになった。(9月16日)

秋とはいっても穏やかな快晴、真夏に近い暑さを感じた。ひと休みして湖面を左に湖岸の国道を網走方面へ走る。シギ類がいたらすぐ車を止めることにし、助手席の栗林さんが探し役に暫く行くと、能取湖で初めてのシギチを見つけ、脇道に車を止め道路の土手を降り背丈を越すヨシ原を掻き分け干潟へ向かった。

広い干潟にはオオソリハシシギ、オグロシギ、夏羽の美しいダイゼンにハマシギ、少数のメダイチドリ、トウネンが混じり合って総数約50羽余りで楽しむには充分であった。

更に行くと道路脇の駐車場に何台もの車が止まっていた。湖岸には赤い絨毯を敷き詰めたようにサングソウが広がり、観光客等が記念撮影をとる姿が多く見られた。

サングソウの先の干潟には、私達の目をひくシギ・チドリ類が散在しているのが見られ、サングソウの群落を越え干潟へ向かった。ここでもオオソリハシシギ、オグロシギが20羽余り、ダイゼン、ハマシギ、メダイチドリ、トウネン等30羽余りを観察、能取湖まで足を伸ばし観光と鳥見を兼ね合わせた成果を喜び合った。

暫く行くと卯原内、この地域の中心市街地、湖岸側がサングソウの群生地として観光的には最も賑やかな所で、保護と観察のための木道、ライトアップ、イベント、出店等観光客を寄せる努力は認めるが、残念ながらもしい案内標識が見当たらず、うっかりすると素通りしてしまう。

卯原内を過ぎ湖岸側の道道美岬ラインへと入る。

この先に干潟が在ってシギチが期待出来そうとのことと車を降り、湖畔へ向かうた直線の排水溝に沿った農道を300m程行って湖畔に出る。この排水溝の土手には随分たくさんのハクセキレイが出入り、歩いて行く先々からホオアカ、アオジ、カワラヒワ、ヒバリ等が次々と飛び出し畑の中へもぐり込んでしまう。

湖畔のヨシ原を越えると広い干潟が広がっていた。案内のとおりシギチが着きそうな環境であることはうなづけたがこの日は1羽のシギチの姿も見ること出来なかつ

た。北東の方向をスコープで見ると能取漁港の岸壁が見える。この岸壁付近も良くシギチの着くポイントとのことで、コムケを出発する時此処を最終目的地と決めて来た所である。

先行の渋谷さん夫妻の姿からシギチを見ている様子はなく、これ以上足を延ばしてもシギチを期待出来る状態ではないと判断、引き返すことにした。

車まで戻る途中で200羽程のヒシクイの群れが上空を東の方から湖面を目指し、雲ひとつない青空を鍵になり竿になり編隊飛行で通過して行くのが見られた。恐らく今渡って来たものと思われる。

帰途につくにも良い時間になり、来た道のりを心地良く走り続ける。往路の平和中央のサンゴソウの群生地に再び立ち寄って見たが、シギチの姿はなくアオバトが5羽岸辺で水を飲んでいるのを見るに止まった。

その後も往路に立ち寄った湿地を覗いてみたが、何れも鳥の姿はなく、ひたすらコムケ湖向け秋晴れのドライブを楽しむことになった。

コムケ湖畔に戻ってきたのは夕方であった。

午前に出発したときと鳥の様子に余り違いはなさそうで、昨夕の賑わいとは比較にならないが、ハマシギを主体に小沼Dの干潟に集まり採餌に余念がない。

朝方見られたカラフトアオアシシギにヘラシギは何処へ行ってしまったのか、ついに発見することは出来なかった。それにしても秋晴れの好天に恵まれ、充実の一日は明日への期待を残して快く暮れて行った。

#### 95年9月17日(日) 曇り時々雨

第3日目 天気は下り坂に向かい雨の近いことを予感させる。この日もまた畜舎付近のキマユツメナガセキレイそして中沼のヘラサギを見て小沼Cへ行く。

オオソリハシシギ、オグロシギが20羽余り、そして昨夜はいなかったツルシギが4羽、一群となって行動していた。カラフトアオアシシギは当初の固体とは明らかに別固体が2羽、寄ったり離れたりしながら同一行動をとっていた。

やがてオオソリハシシギ、オグロシギと行動をともにしていたツルシギが突然飛び立ったかと思うと、一気に大沼を越えサロマ湖方面へ姿を消してしまった。

その中に聞き慣れないシギの鳴き声が近づいて来た。ホウロクシギである。ツルシギの飛び去った後の落胆を慰めるかの様に近くの水面上に降り恰好の目標に喜んだのも東の間、先程と同じ鳴き声が近づいて来て上空を通過したかと思うや、その鳴き声に誘われ応えるように折角のホウロクシギもそのまま紋別方面へ飛び去って行った。

ホウロクシギとの出会いのチャンスは少ないだけに残念であった。

今にも雨が降り出しそうな空模様が変わって来た。シギチの様子も1日目、2日目そして3日目と次第に下り坂に感じる。

朝からキマユツメナガセキレイ、ヘラサギも充分に観察、この時点で常連のアオサギ、トビに飛び去った4羽のツルシギ、ホウロクシギ2羽を含め、小沼A～Eの往來を繰り返しているシギチはオオソリハシシギ8、オグロシギ13、アオアシシギ2、カラフトアオアシシギ2、ムナグロ1、ハマシギ30±、メダイチドリ4の他カワアイサ8、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、ヒバリ、カワラヒワ、ノビタキ、オオジュリンといったところで、これ以上の好転は望めないものと判断、小沼を切上げ帰途の途中大沼に立ち寄り様子を見ることにした。しかしこの3日間大沼では注目する様なシギチに出会うことはなかった。



ツルシギ

この度の2泊3日のコムケ湖、サロマ湖、能取湖畔の探鳥紀行の中で珍鳥カラフトアオアシシギ、ヘラサギ、キマユツメナガセキレイ、そしてヘラシギ、ウズラシギ、ツルシギ、東の間ではあったがホウロクシギとの出会い、初めて訪れた能取湖畔での200羽余りのヒシクイの渡來の確認等同行の森田さん、栗林さん、現地で一緒になった渋谷さん夫妻、松野君等とともにシギチの魅力を中心に楽しく充実した3日間を過ごしたコムケ湖を後にすることになった。

#### 参考資料

日本産鳥類図鑑 東海大学出版会

鳥630図鑑 (財)日本鳥類保護連盟

生物大図鑑鳥類 世界文化社 他

〒062 札幌市豊平区西岡1条7丁目1-14

なお、本文ご理解の一助として第106号から「コムケ湖探鳥マップ」を再掲いたしました。また、参考写真を添えましたので筆者のご諒解を得まして原文の一部を割愛させていただきました。

(編集部)

# 野幌森林公園 休養園地区の鳥類（平成9年）

— 野幌森林公園休養園地区 鳥類調査（春季～夏季）報告書 —

富川 徹

## はじめに

野幌森林公園は、私どもの「定例探鳥会」やほぼ月1回行われている「歩きましょう」などを通じた身近な探鳥地であるとともに、これまで北海道野鳥愛護会を育ててくれたもっとも大切な自然公園であることは言うまでもありません。

休養園地区は、野幌森林公園の北西部に位置し、私どもの探鳥コースとしては直接的に関係の少ない場所ではありますが、もちろん公園で見られる鳥の生活という観点においてはなくてはならない貴重な場所です。この地区は北海道が約30年前に野幌森林公園（道有地）として民間より買い上げたもので、以降集団施設地区（記念施設地区）としての休養園地区に割り当てられてきましたが、その後直ぐに施設整備等はなされては来ませんでした。しかし、今日の時代の要請に伴い自然公園としての公園整備計画が浮上し、この程地区内に自然誌ふれあい交流館、遊歩道、駐車場などが自然に配慮した形での具体的な整備の検討が進められて来ています。

野鳥の保護を念じる私どもの気持ちとしては少なからず自然環境が損なわれることでは何とも大きな痛手であり、できることならそのままの状態でも自然を保持していただきたいという希望においては皆同じ思いでありましょう。開発か保護かほんとうに難しい問題です。

さて、本報告は既に野幌森林公園を守る会が北海道に対して報告したのですが、実際には北海道野鳥愛護会の会員個人が平成9年4月～7月にかけて自主的に調査を担当し、ボランティア活動を通じて真実のデータが自

然保全につながることを願いつつ、北海道の進める公園整備計画における環境調査の一部について協力したものであります。

一方、これまで私どもの北海道野鳥愛護会としては自然保護活動のあり方などについて真剣に取り組みがなされてこなかった現状等を踏まえ、昨今では総会及び幹事会などでそれらの議論がたびたび交わされるようになりました。そんな中、一応幹事会においては野鳥愛護・保護の必要性に関して必要に応じた関係機関への調査協力などについて概ね意見の一致が得られたところではありますが（参考：「野鳥愛護・保護活動のあり方について」白澤昌彦氏 本誌 109号）、引き続き検討の余地が望まれることに加え、さらに多くの会員にもそれらのあり方について考えていただきたいことなどから本報告を掲載する運びに至った次第です。

本誌への掲載にあたっては、私ども北海道野鳥愛護会からの意向に対して、野幌森林公園を守る会及び関係会員、北海道野幌森林公園事務所の承諾を得て行うものです。以下に「野幌森林公園休養園地区 鳥類調査（春季～夏季）報告書、平成9年7月 野幌森林公園を守る会」として、基本的には報告書の全容を扱い示すことと決めていますが、趣旨に影響の少ない図表（詳細図表）につきましては紙面の都合上割愛しています。どうぞご了承下さい。

本報告が、これからの野鳥愛護及び保護活動のあり方を考える基礎資料になれば幸いです。

## 野幌森林公園休養園地区 鳥類調査（春季～夏季）報告書

### 1. 調査目的

調査は、北海道が進める野幌森林公園休養園地整備計画の一環として自然環境調査の鳥類調査の補完調査を行うものであり、野幌森林公園を守る会（以下「当会」とする）は将来の野幌森林公園における休養園地区の保全と利用等のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的として北海道に協力し実施するものである。

### 2. 調査内容

#### (1) 調査項目

本調査は休養園地区及びその周辺の鳥類相を把握

するために行うものであり、北海道が昨年度行った調査に引き続いて今回春季から夏季における鳥類相調査を当会が一部担当するものである。

#### (2) 調査地

調査地の位置は、図1に示すとおりである。

鳥類相調査は、休養園地区及びその周辺の既存の歩道などにラインセンサスルート2ルートと定点観察地点2地点の計4地点を設定した。これらの調査地の選定にあたっては、できるだけ植生及び地形等の環境条件を考慮した。

調査地の環境の概要等は次のとおりである。

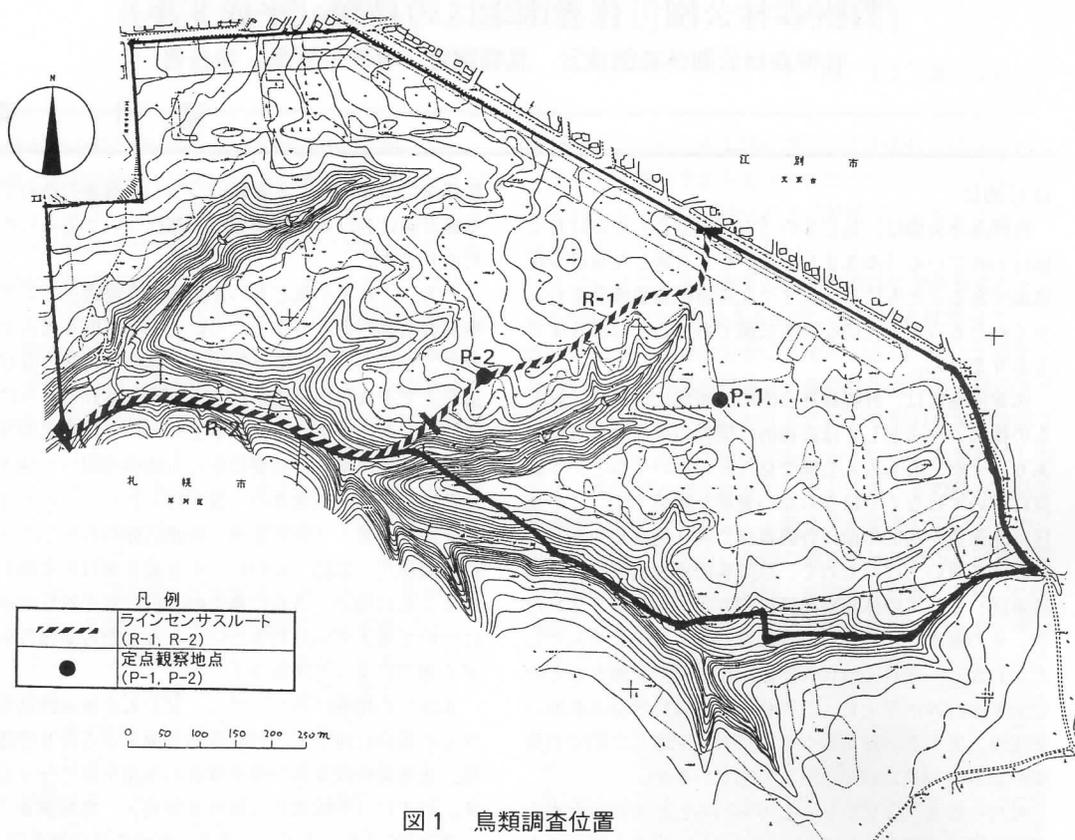


図1 鳥類調査位置

1) ラインセンサス調査

R-1: 休養園地北側ポロベツ川上部の平坦な台地部の約0.5kmのルート。

文京台南町の住宅地に隣接する平地で、大半はオオアワダチソウ、クマイザサ、カモガヤ、オオヨモギ、アカツメクサ、ススキなど帰化植物を主体とする草原環境となっている。樹木には園地入口部で防風保安林として植林されたナナカマドがみられる他、シラカンバ、アズキナシ、カラマツなどの人為による植栽の広葉樹及び針葉樹の樹木も所々に散財する。

R-2: 休養園地南側ポロベツ川の沢筋部約0.5kmのルート。

森林環境となる台地斜面と沢地で、ミズナラ、ハルニレ、エゾヤマザクラ、ホオノキ、ベニイタヤ、ナナカマド、ミズキ、ハクウンボク、ウダイカンバ、ヤナギ類などの広葉樹が主体となっている。他に河畔にケヤマハンノキの人工林も一部みられる。林床はクマイザサ、ハイイヌガヤ、オシダ、アキタブキ、フッキソウ、スゲ類

などである。

2) 定点観察調査

P-1: 台地部の農家跡地。

住宅地に隣接する平地で、ドロノキ、ヤチダモ、シラカンバ、オニグルミ、カラマツ、トドマツなど人為による植栽の針葉樹及び広葉樹がやや混じった樹林環境と、クマイザサ、オオアワダチソウ、フッキソウ、オオヨモギなどの帰化植物の多い草原環境からなる。また後背の南西部はポロベツ川の沢筋に至る広葉樹林である。

P-2: 台地部の農家跡地 (R-1ルート上)。

休養園地のほぼ中央部の平地で、オオアワダチソウ、クマイザサ、カモガヤ、オオヨモギ、アカツメクサ、ススキ、チシマザサなどの帰化植物を主体とする草原環境である。

(3) 調査期日

調査は表1に示す調査日の概要のとおりである。

(4) 調査方法

鳥類相調査は、現地調査によりラインセンサス法及び定点観察法を用いて行った。すなわち、ライン

センサス法は調査ルートを設定、時速約2kmで歩きながら設定された調査ルートの左右それぞれ25m、両側計50mの幅内に出現する鳥類を姿または鳴き声によって確認し、種類及び個体数を記録する方法とした。

また、定点観察法は概ね眺望のよい地点を設定し、そこで一定時間とどまって、確認される種類及び個体数を記録する方法とした。

本調査では、比較的狭い範囲ではあるが、ラインセンサスルート及び定点観察地点をそれぞれ2地点ずつの4地点選定し行った(図1)。調査員は当会の会員有志があたり毎回調査地に1~3人配置しほぼ同時刻内に調査した。

さらに、これらの調査は早朝での調査であったが、フクロウなどの夜間に出現する鳥類についてもできるだけ期間中における他の目撃等の確認情報として整理しておくことが望ましいから、その他の確認種として加えた。

表1 調査日の概要

回	月日	時間帯	天気	気温	摘要
1	4月20日	5:00~6:45	曇り	4.4°C (6:45)	
2	4月29日	4:50~7:00	快晴	8.7°C (4:50)	
3	5月5日	5:05~6:05	快晴	3.5°C (5:05)	
4	5月18日	5:00~6:00	曇り		
5	5月25日	4:50~5:50	曇り	10.9°C (5:10)	
6	6月1日	5:00~6:00	曇り	7.9°C (5:00)	雨上がり、運動会花火
7	6月15日	5:00~6:00	曇り		風ややあり
8	6月29日	5:05~6:00	曇り	14.9°C (6:00)	風あり
9	7月6日	5:00~6:00	曇り	17.0°C (6:00)	
10	7月13日	5:00~6:00	曇り	17.8°C (5:00)	

3. 調査結果

(1) 鳥類相調査

休養園地区及び周辺における春季から夏季に確認

された鳥類は、表2に示す合計10目23科51種であった。

地点別の出現種等の概要は以下のとおりである。

表2 鳥類調査結果一覧

No.	種	R-1	R-2	P-1	P-2	O	Apr	May	Jun	Jul
1	アオサギ	○	○	○	○		○	○	○	○
2	マガモ				○		○			
3	トビ	○	○	○	○		○	○		
4	チゴハヤブサ	○			○				○	
5	キジ	○	○	○	○		○	○	○	○
6	ヤマシギ					○		○		○
7	オオジシギ	○	○	○	○		○	○		
8	キジバト	○	○	○	○		○	○	○	○
9	アオバト	○	○	○	○				○	○
10	カッコウ	○	○	○	○			○	○	○
11	ツツドリ	○		○				○	○	
12	フクロウ					○			○	○
13	アリスイ	○		○	○		○	○	○	
14	ヤマゲラ	○	○				○			
15	アカゲラ	○	○	○	○		○	○	○	○
16	コゲラ		○	○	○		○	○	○	○
17	ヒヨドリ	○	○	○	○		○	○	○	○
18	モズ	○		○	○		○	○	○	○
19	コルリ		○					○	○	
20	ルリビタキ	○	○	○			○	○		
21	ノビタキ	○					○			
22	トラツグミ	○	○	○	○					
23	クロツグミ	○	○	○	○			○	○	○
24	アカハラ	○	○	○				○		○
25	ツグミ		○				○			
26	ヤブサメ	○	○	○	○		○	○	○	○
27	ウグイス	○	○	○	○		○	○	○	○
28	エゾセンニュウ	○		○	○				○	
29	センダイムシクイ		○	○				○	○	○
30	キビタキ	○	○	○				○	○	○
31	オオルリ		○	○				○	○	
32	エナガ		○		○		○	○		
33	ハシブトガラ		○	○	○		○	○	○	○
34	ヒガラ		○	○	○		○			
35	ヤマガラ	○	○		○		○	○	○	○
36	シジュウカラ	○	○	○	○		○	○	○	○
37	ゴジュウカラ	○	○	○	○		○			
38	メジロ	○	○	○	○			○	○	
39	ホオジロ	○	○	○	○		○	○	○	○
40	ホオアカ	○		○	○			○	○	
41	ミヤマホオジロ			○			○			
42	アオジ	○	○	○	○		○	○	○	○
43	カワラヒワ	○	○	○	○		○	○	○	○
44	ベニマシコ		○	○	○		○			
45	イカル	○	○	○	○			○	○	○
46	シメ	○		○	○				○	○
47	ニューナイスズメ	○							○	○
48	ムクドリ				○					○
49	カケス		○	○			○	○		
50	ハシボソガラス	○					○	○	○	
51	ハシブトガラス	○	○	○	○		○	○	○	○
計	10目23科51種	36	35	36	37	2	32	38	36	28

(注) R:ラインセンサス, P:定点観察, O:その他(R,Pで確認されていない種のみ)

1) ラインセンサス調査

R-1: 確認種は36種で、全体的にはヒヨドリ、カワラヒワ、キジバト、ホオジロ、アオジ、ハ

シフトガラス、アオサギ、ホオアカなどが優占していた。

R-2：確認種は35種で、全体的にはアオジ、ヒヨドリ、ヤブサメ、カワラヒワ、ハシブトガラ、シジュウカラ、センダイムシクイ、キビタキなどが優占していた。

## 2) 定点観察調査

P-1：確認種は36種で、全体的にはカワラヒワ、ヒヨドリ、シメ、キジバト、ハシブトガラス、アオサギなどが多く確認された。

P-2：確認種は37種で、全体的にはカワラヒワ、キジバト、ヒヨドリ、ハシブトガラス、アオサギ、ホオジロ、キジなどが多く確認された。

## 3) その他の確認種

鳥類調査結果一覧(表2)の「O:その他」の欄は、ラインセンサスルート及び定点観察地点では確認されず、それ以外の調査期間中における他の目撃等の確認で得られたものである。それらの結果、今回は調査期間中の夜間時に確認されたヤマシギ、フクロウの2種があげられる。

## (2) 着目すべき鳥類

着目すべき鳥類として該当する種はチゴハヤブサ、オオジシギ、フクロウの3種が抽出された。



フクロウ

## 4. まとめと考察

### (1) 鳥類相調査

休養園地区及びその周辺地域における春季から夏季の鳥類の生息状況を調査した。

調査の結果、今回生息が確認された鳥類は合計10目23科51種であり、その大半の鳥類は陸鳥で、キジ、オオジシギ、カッコウ、ノビタキ、ホオジロ、ホオアカなどの草原環境に出現する種をはじめ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラなどのキツツキ類、シジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、エナガなどのカラ類、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、

キビタキ、オオルリなどのヒタキ類の森林環境に出現する種、及びトビ、ハシブトガラスなどの人里環境に出現する種などが確認され、マガモなどの水辺環境に出現する水鳥類が極めて少ない結果であったが、広範囲にわたる多様な環境の鳥類の出現結果が示されたといえる。

各地点別(ルート・地点)では、出現数は35種から37種の範囲内に収まり、出現種でわずかに差異があったもののそれ程に大きな変化はなかった。このことは休養園地の広さと調査手法等に起因していたものと考えられる。すなわち当初における調査地選定時の環境条件等の考慮設定にもかかわらず、結果としては調査地点間の距離が互いに近く隣接する環境の連続性に大きく反映し、特に広範囲を飛翔移動する種や鳴き声等によって生息の情報が得られる種など確認の得やすい種では同時的に重複記録されるなどの出現も考え得る結果となった。一方、月別の出現種については、春季から夏季における変化傾向は顕著に示され概ね基礎的な資料は得られたといえる。

なお、休養園地区及びその周辺の鳥類等について具体的に公表されている資料はこれまでは見あたらないが、富川(未発表)の記録によれば93種の生息が確認されており、そのうち隣接する住宅地と休養園地区の確認種は65種となっている。現段階ではこれら種数だけで本調査結果と単純に比較することはできないが、本調査面積が極小地であったことや、また限られた期間内での調査記録としてみると、都市周辺環境にあっては多くの種類の確認があったものと受け止められる。については基礎的な資料として今後の継続調査等に向けての検討において貴重なものとなる。

このことは、とりもなおさず周辺環境を含む草原環境や人里環境などとあいまって野幌森林公園の自然の豊かさとその多様な環境要素に大きく依存していることが示唆されよう。

### (2) 着目すべき鳥類

今回確認された種のうち着目すべき鳥類は、チゴハヤブサ、オオジシギ、フクロウの3種であった。

チゴハヤブサ、6月1日のみのR-1で1羽とP-2で2羽の確認で、いずれも広葉樹の樹上に止まり鳴いている個体を目撃確認したものである。本種は我が国では北海道で繁殖が知られており、一般には平地や市街地にも生息するが本調査ではこの日のみの確認であった。「私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録—」(北海道野鳥愛護会1988)によれば本種の過去の生息情報は極めて少なく、休養園地区及びそ

の周辺地域においての本種の繁殖可能性は現状ではないものと予想される。なお、今回確認した位置や時間から判断すると、R-1の1羽の確認はP-2の2羽（ペアであるかどうかは不明）に含まれる個体である可能性は考え得る。

オオジシギは、本調査では調査を開始した4月20日から6月1日の計6日で19件（都合主な行動のみ扱った）の確認を得た。それら確認の位置等は図2に示すとおりである。これらのオオジシギの確認については、大半が上空を巡回飛翔するディスプレイ行動であるが、その他の行動として2件で地上からのディスプレイの声とまたそれとはやや違った声（地鳴き？）が聞こえたことがあげられる。今回においては本種の繁殖を具体的に確認するまでに至らなかったが、調査時の複数による個体確認や調査期間中の他の観察などから判断して、休養園地区内には先の2箇所での地上鳴きの位置を中心としてその付近にそれぞれ1番（つがい）の営巣存在のあったことも推察される。本種の営巣確認は比較的困難と思われるが引き続き生息状況等を把握していくことは大切である。

フクロウは、6月20日、7月12日に1羽ずつ休養園地東側の樹上より鳴き声を確認し、前者が約60分、後者が約30分の連続した声の確認であった。一般に本種は営巣などに適した樹洞のある大径木の減少等から生息数が少なくなったと言われるが、野幌森林公園には以前から数番（つがい）が繁殖しているとされ、現状において昨今までにも生息情報が希にある。今回の結果と合わせて、特に大沢口周辺のこれまでの目撃情報及び富川（未発表）の記録などから考えると、休養園地を含む周辺地域はフクロウの生息地であることには相違ない。今回の確認個体は大沢口周辺で生息する個体と思われるが、ネズミ類、ガ類などの小動物採餌のために休養園地を利用していたものと考えられる。いずれにせよ、休養園地区及びその周辺地域は、野幌森林公園に生息するフクロウの最良の採餌場であり、かつ数少ない生息域として位置づけられることから、今後はさらにそれら生息状況を明確にすることとともに生息環境を維持していく方策の検討が急務である。

## 5. 調査を終えて

調査結果の記録については、その時期の鳥類相としてみると全体では十分なものであり、特に月・日別での出現状況においては種毎にそれら特徴が捉えられておもしろい結果が得られたものと自負するところである。しかしながら、調査法や整理法において反省しなければならぬ点もいくつかあげられ、当会における

調査体制等と合わせてこれらの課題としたい。

さて、鳥類相ではともかく、着目すべき鳥類では継続調査の必要性をあげているが、今後の具体的な整備計画のうちの施設整備等においてはそれら種の詳細な生息情報が必要であることにはほかならないといえよう。今回は当会の結果では特にオオジシギとフクロウが対象にあげられるが、計画を推進するにあたっては保全のためのさらなる配慮は欠かせないものとする。

今日、環境政策等の基本的考え方においては、とりわけ地元団体及び住民等の意見を尊重反映させていく姿勢が行政のなかでも重視しつつあることは誠に望ましいところである。今回は鳥類調査の一部の協力には過ぎないが、当会として考える材料を少しでも提供できたことは一緒に検討する機会を得たという意味でもあり大変有意義なものであった。

わずか10日の調査日でも4月から7月の旬間となるといかに大変であるかを思い知らされた調査ではあったが、これらの結果がこれからの野幌森林公園の自然保護につながることを願うものである。

## 野幌森林公園を守る会

### 野幌森林公園休養園地区鳥類調査 調査班一同

富川 徹（リーダー）  
松山 潤  
伊東 裕二  
佐藤ひろみ  
中村 茂  
柳沢 信雄



ノビタキ

## 札幌市とその周辺における最近のツバメ事情

樋口孝城

スズメ目ツバメ科に属するいわゆるツバメ類のうち、北海道で観察されるものはイワツバメ、ショウドウツバメ、コシアカツバメ、ツバメの4種類である。コシアカツバメカは道北などでの繁殖例が過去に少数あるが、最近の記録は見当たらない。イワツバメとショウドウツバメは広く全道で繁殖し、札幌市およびその周辺でも毎年多数の繁殖が確認されている。一方、ツバメの北海道における繁殖は道南、道央あたりまでである。十勝南部や利尻島での繁殖記録はあるが、図鑑などによっては道東や道北を分布域からはずしているものもある。サクラ前線と並んでツバメ前線という言葉があるように、春到来を告げる代表的のものの一つではあるが、北海道全体をみた場合、どちらかというとな少ない鳥の一つである。近年、ツバメの数は一部を除いて全国的に減少傾向にあるといわれている。札幌近辺でも時折観察される程度であり、一般的なイメージとは異なり、むしろ珍しい鳥といった感じである。ここでは今年の観察・調査結果をもとに、札幌近辺の最近のツバメ事情の一部を紹介してみたい。

今年（平成9年）6月上旬、愛護会会員の広川淳子さんは札幌市北区の石狩川付近での野鳥観察中にツバメを見つけ、彼等が近くの酪農家の牛舎を出入りすることを確認した。牛舎所有者の許可を得て牛舎内を観察したところ、天井から吊り下げられた蛍光灯の上に巣が造られており、親がさかんに雛に給餌をしていたとのことであった。後日私も含めて何人かであらためて牛舎およびその付近の観察を行った。石狩川まで数百メートルのところ、牧草地および原野に囲まれて4棟の牛舎があり、どの牛舎にも巣が造られていた。一つ一つの牛舎の大きさはそれぞれ約300坪、中には50頭ほどの牛が飼育されていた。出入口と窓は開放されており、ツバメが自由に出入りできる状態であった。一つの牛舎内にはそれぞれ二つの巣があり、合わせて8つがいの子育てをしていた。牛舎所有者の話によると、牛舎が建てられたのはちょうど10年前の昭和62年（1987年）であり、記憶ははっきりしないが、建てられてすぐの年か、その翌年からツバメが巣を造るようになり、その後毎年4月後半にやってきて、秋近くにはいなくなるとのことであった。

「こんな所でツバメが繁殖していた」と、私達はしばしの興奮を覚えたのであったが、実は、この場所での繁殖については、野鳥だより前号（109号）の泉勝統氏の記事にあるように、野鳥関係の一部の人はずでに数年前から確認していたこと、また泉氏自身も2年前の1995年

に確認していたことを付け加えておかなければならない。よく近くを通りながらも今年まで気づかずにいた私達の頭には、もう札幌ではツバメは繁殖していないという先入観があったのかもしれない。

それはさておき、参考になったのは牛舎所有者の方の「牛舎にはツバメがつきもので、珍しいとは思っていなかった。ここ以外の牛舎にも来ている。」という言葉であった。これを聞き早速北区篠路町拓北にある別の牛舎を訪ねたところ、4軒のうち2軒で今年の営巣が確認された。また、江別市角山にもいるということを目にしたので、電話での聞き取りをしたところ、その時点で話をうかがえた10軒のうち、7軒までが営巣しているとのことであった。最終的に今回の調査では札幌市北区篠路町で6軒、江別市角山で10軒、江別市元野幌、大麻、中島、篠津でそれぞれ1軒の、総計20軒の牛舎での営巣が確認



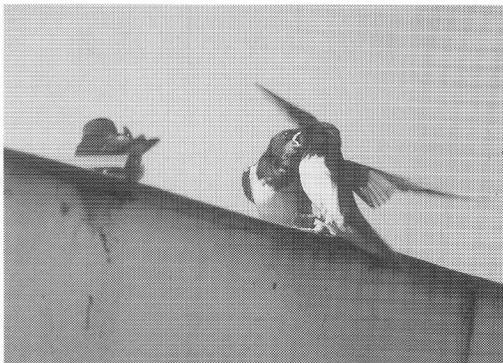
蛍光灯の上の巣と親子 浜田 強 撮影

された。巣を造るところは大部分がやはり蛍光灯の上であり、壁に造るところも少数あった。また、多くは2回の繁殖を行うということであった。1軒の牛舎内で2つがい営巣するところもいくつかあったので、合わせて30つがい近くが繁殖したものと思われる。

どこの牛舎の所有者も糞の始末などに多少の手間がかかるけれども、毎年の訪れを楽しみにし、また巣立ちまで暖かく見守っている気持ちが十分感じられた。なかにはわざわざ巣を造るための台を作っているところもあり、ツバメに対する思いやりが深く感じられた。牛舎周囲には巣材料や餌となるアブやハエが豊富で、繁殖期のツバメにとっては良い環境であろう。酪農家の人にとっても、牛を悩ますそれらの昆虫を食べてくれるということで、ありがたい存在であろうが、そういうことを超えて酪農

家の人たちが「自分のところのツバメ」のことを、自分の子供のことを語るかのように話してくれたのが印象的であった。

今回20軒の牛舎で営巣が確認されたが、営巣開始年をたどってみると最も早いものが江別市角山のある牛舎で、今から30年近く前の1970年前後である。角山以外ではここ10年以内に初めて営巣を開始したところがほとんどである。角山の1軒の牛舎で30年程前に、どこからかやってきた一つがいのツバメが繁殖を開始し、年ごとにその子供たち、孫たちによる営巣が近隣の牛舎に広がっていつ



巣立ち雛に給餌する親 新城 久撮影

たとえるのはあまりにも大胆な仮説であろうか。30つがいの多くが2回繁殖し、1回に3～5羽の子が巣立ちとしたならば、さまざまな原因による脱落を考慮しても、来年の春には今年以上の数のツバメが戻ってくることが十分考えられる。近隣にはまだ利用されていない牛舎がいくつかあり、近い将来、それらが利用される可能性がある。

今年および最近のツバメの営巣は札幌市北区篠路方面及び江別市角山方面に限られていたが、10年程前には手稲区前田、北区新川、当別町美登江地区あたりの牛舎でも営巣していたことが聞き取り調査で確かめられている。いずれも数年間連続して営巣したそうであるが、牛舎が取り壊されてしまったという一例を除いて、ツバメが来なくなってしまった理由は明らかではない。参考までに、今年の営巣が確認された20軒のうち18軒は、初めて営巣した年以来毎年とのことであるが、篠路町拓北の2軒では途中欠けた年があったそうである。その原因の一つはカラスによる妨害らしい。牛舎周辺に住宅などができることによりカラスが増え、ツバメの繁殖に悪影響を及ぼすこと、それがその場所の放棄へとつながることは十分に考えられ、頭の痛い問題である。

ツバメといえば人家の軒というのが古くからの一般的イメージであるが、そのような例は今回調べた限りにおいては見ることはできなかった。昭和47年(1972年)に

発行された「北国の自然と野鳥」(井上元則著)には、「札幌市には昭和の初期まで、春になると尾が長くてふたまたまになっているツバメが渡来し、南一条あたりの大きな商家には軒並みに巣をつくっていたものである。」と記されている。もっとも札幌市といっても、当時は豊平、琴似、手稲、篠路などはまだ併合されておらず、いわば今の札幌中心部だけで人口が20万弱、現在の市域全体でも25万前後ということであり、自然環境、建物構造とも現在とは全く違う状況である。同書によると昔の札幌市内でツバメが普通に見られたのは昭和10年(1935年)頃までとなっている。今回営巣が確認された地域に近い篠路でも、古くからの人の話によると、ツバメをよく見たのは戦前までのようである。小川巖氏(現エコ・ネットワーク代表)は1970年代前半に篠路駅近くに表通りに面した民家での営巣を確認している。その後の報告はないが、地元の話を含めて総合すると、小川氏の観察あたりが最後と考えられる。

今回観察したツバメたちのルーツはどこにあるのか。年代と場所だけを単純に考えると、篠路駅近くで営巣していたものが角山に移っていったとすることで一応のつじつまはあうが、あまりにも大雑把な推測ではある。今回繁殖が確認されたところのほとんどが石狩川に近いことから、そちらの方面も考えられる。古くから鳥を見ておられる方の話によると、石狩河口橋ができる前に石狩渡船場近くの建物に営巣していたそうである。しかしながら、最近では5年程前から2、3年間、石狩川のそばの車庫で営巣していたということしか確認されておらず、河口近くにもツバメが営巣できる建物はなくなってしまったようである。河口のツバメが石狩川に沿って営巣地を求め、現在の地にたどりついたという推測も可能ではあるが、これまた勝手な推測以外の何物でもない。振り返ってみるに、札幌市およびその周辺におけるツバメの繁殖に関する記録があまりにも少ない。現在のツバメたちがこれからどのような道をたどるかは引き続き調査していく予定であるが、過去の状況について、ほんの小さなことでも情報をお寄せいただけたら幸いである。

なお、最後に付け加えておかなければならないが、酪農家の方によっては電話での聞き取りには応じてくれるが、直接の訪問を好まない方もおられた。また、ツバメを見に来る人が多くなることに不安を持たれる方もおられた。愛護会会員の方々には釈迦に説法であろうが、もし来年の繁殖期にでも観察に行かれる場合はツバメに対する配慮はもとより、酪農家の方々に対する配慮も充分にお願いしたい。

〒002 札幌市北区拓北5条2丁目10-17



初めての  
バードウォッチング  
—東米里探鳥会—  
9. 6. 15  
石川悦子

バードウォッチングをしたのは今回が初めてと言っていいでしょう。これまでは白鳥が来たと聞いては白鳥を見に行った事がありますが白鳥だけを確認して帰って来る。他の鳥は目に入らない見ようもしない様なただの野次馬でした。

以前インコを飼っていたことがありまして、翼のある鳥を狭い所で飼うという、残酷な事は分かっていても可愛らしさに負けて買ってしまいました。死んでからはもう二度と飼わないと決めましたが、それでは欲求不満が募るばかりです。そこでバードウォッチングをしてみようと思立ちました。

大変不安でした。知っている方もいませんし、でも不安は一掃されました。私の持って行きました双眼鏡は十倍の物でしたが、会員の方がフィールドスコープを覗かせて下さり、間近に鳥を見る事ができました。「そのために持って来たんだから」と、鳥をレンズに拾っては気さくに見せて下さり、おかげで私にも十二種類もの鳥を見る事ができました。短い時間で、また場所も狭い範囲でしたのに札幌市内にもまだまだ沢山の種類の野鳥がいる事がよくわかりました。それでも、以前ほどは見られないと言うお話でしたから、鳥にとっては住みづらい街になりつつあるのでしょうか。でも私にとっては、本で見られなかった鳥が、名前は聞いた事があっても見たことのない鳥を見る事が出来たのですから。今まで私が見ようとしなかっただけで山で海で様々な鳥に出会っていたと思うと今さらに残念に思われます。

私が今勤めています会社が札幌近郊にあり、住宅もまばらですので市街よりは種類が見られる様にも思います。昼休みなど僅かな時間ですが木々や空を見上げると時間が多くなりました。これを機会に身近な所からバードウォッチングを続けて行きたいと思います。

どうもありがとうございました。

〒063 札幌市手稲区新発寒5条1丁目1100番79

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、コウライキジ、コチドリ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト、シメ

以上28種

【参加者】高橋利道、古川一幸・さとみ、鎌田 博、高栗 勇、森田新一郎、山田良造、河崎国広、犬飼 弘、今 光江、五十嵐加代子、遠藤尹希子、戸津高保・以知子、鈴木繁雄・英子、村田しずほ、山田甚一、佐藤 勇、柳沢信雄・千代子、羽田恭子、清水朋子、松原寛直・敏子・綾子、野坂英三、坂井伍一・俊子、蒲澤鉄太郎・則子、佐々木 裕・政子、石川悦子、西村義行、板田孝弘、中正憲信 以上37名

【担当幹事】野坂英三、戸津高保

## 平和の滝夜の探鳥会

9. 6. 28 (記 録)

【記録された鳥】マガモ、キジバト、ジュウイチ、ツツドリ、ヨタカ、ヒヨドリ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、キビタキ、アオジ 以上12種

【参加者】足羽イネ子、蒲澤鉄太郎・則子、佐藤ひろみ、柴田一郎・衛子、鈴木繁雄・英子、武沢和義・佐知子、戸津高保・以知子、長岡臣子、新妻 博、野坂英三、長谷川 稔、松原寛直・敏子、柳沢信雄、由井 太 以上20名

【担当幹事】戸津高保、野坂英三

## 福移探鳥会に参加して

9. 7. 6 西田 弘

7月6日、午前8時40分、北海道の豊かな自然を楽しむ守ろうとする会に参加する。天気予報は曇りだったが、バードウォッチングにふさわしく晴天に恵まれた。集会場所には30余名の参加者達が次々と集合した。当日は豊平川と石狩川の合流地点での探索だった。

アオサギほか26種類の野鳥を観察することが出来た。参加者達は双眼鏡を首にかけ、フィールドスコープを背おい、野鳥の鳴き声に耳を傾け、レンズに向い合い、野鳥に集中した。シマアオジが姿を見せた。草むらにかくれ、顔を沈め、なかなかレンズに収まってくれない。待つこと30分、参加者達をいらだたせたが、スコープに美しく、愛らしい姿を現し、我々を満足させてくれた。

あわただしく毎日を過ごしている自分にとって、せめて日曜日だけでも、森・山野・水辺で野鳥のさえずりを見聞きし、同士と語り合える機会を持ちたいと日頃思っていた。新聞の情報欄に載っていたので参加し、初めての体験である。近くの公園や池にいる野鳥など、きれいな鳥だと思っただけで名前が知らない。渡り鳥なのか、草原にいる野鳥なのか知っておきたいと思ったのが率直な思いです。

自然を大切に、多くの野鳥が住める環境を作ってあげたいものと強く感じました。

〒001 札幌市北区屯田4条3丁目1-8

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオジロ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシブトガラス 以上27種

【参加者】蓮本信夫、西田 弘・マサエ、河崎国広、後藤義民、横井澄子、岡田 実、鎌田 博、佐藤ひろみ、中正憲信、杉田範男、鈴木繁雄・英子、道場 優、高橋利道、戸津高保・以知子、栗林宏三、森田新一郎、野坂英三、小堀煌治、広木朋子、松原寛直、富川 徹・優、羽田恭子、樋口孝城、山田良造、板田孝弘、松中、井上公雄 以上31名

【担当幹事】富川 徹、道場 優

## 鶴川探鳥会に参加して

9. 8. 24 橋 爪 陽 子

お花、山、鳥など夢先案内人 道場先生から「鶴川へシギを見に行かない。」と誘われてちょっと忘れかけてた双眼鏡、鳥図鑑、雨具、長靴などの道具を準備して、くもり空の日曜日J R鶴川駅前一番乗り。9時すぎると今日同じ目的らしい格好の人達が次々車から降りてきて1ヶ所に集まりこのころどこでどんな鳥と出合ったか、また山の話に盛り上がる人など、近況報告など交流し、9時30分出発。国道の信号渡るとすぐ牛舎があったりで広い草原です。馬牛の糞を上手に横切って歩いていると柵の先端にはオオジュリン、カワラヒワなど見分けられなかったけど幼鳥も一緒だったようです。小さな沼にはハマシギ。ヒバリシギ、イソシギの水浴びと毛繕いをしてた仕草がかわいかったです。河口近くに行くところを釣りをしておじさんが一人私達の集団を見て竿を少し離れた所に見えないように一応置いて遠慮してた様子でした。突然「早く！早く！」と栗林さんが高倍率の望遠鏡をのぞくと大きくはっきり見えるばかりにして向こう岸の草むら近くに地味な周りの景色の中に一際まっ青に目立つカワセミが入ってました。はっとして目が覚めました。次に驚いたのは防波堤に並ぶ数十羽のウミネコの中にミツユビカモメがたった一羽いると云うのですが「少しほかの鳥より小さいよ」（皆同じ位にしか見えない）とか「今背中に見え込んでるよ」（何羽もそうしているしなおさら分かんない）何度も見てるうちなんだか頭重く目もくらくらしてきたので皆と反対向いて親子馬

を見たり足元に小さな白とピンクのゲンショウコを押し花にしていると「早く！今度は分るよ」と再び呼んでくれてとうとう私にはほとんど似ているけど説明どおり頭の横にヒュッヒュッと黒く特長のあること確認「あー最後だったけど良かったネ」と云って下さり嬉しかったです。自分だけではとても探せず愛護会の人達との大きな差を感じながらでしたが優しくユーモアの言葉を聞き笑いながら楽しかったです。帰りは道端に咲く花の名前を柳沢先生が一つ一つ教えてくださり、ハッカ、ツユクサ、イヌタデ、ダイコンソウ、ススキなど秋の風を受けながら健康増進総合施設“四季の館”と云うオープンしたばかりの解放されている“いこいの広場”で持参したお弁当を食べながらこんな近くで馬とか牛を見たのも久しぶりだったし、いつもより沢山いたよと云ってたアオサギ、そしてコチドリ、シロチドリなどを思い出しながら自然と向き合うことが出来たことに感謝と、早起きして良かったと思いました。

〒003 札幌市白石区南郷通南6-37

【記録された鳥】アビsp、カイツブリ、アオサギ、トビ、チュウヒ、オオタカ、カルガモ、コチドリ、シロチドリ、イソシギ、トウネン、ヒバリシギ、ハマシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ミツユビカモメ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、ニューナイスズメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 以上31種

【参加者】橋爪陽子、佐藤幸典、鈴木繁雄・英子、北山政人、鷺田善幸、中正憲信・弘子、羽田恭子、佐藤ひろみ、柳沢信雄、樋口孝城・陽子、森田新一郎、道場 優、戸津高保・以知子、松原寛直、山田良造、小堀煌治、村田静穂、白澤昌彦、栗林宏三、野坂英三、板田孝弘、内田秀満、井上公雄 以上27名

【担当幹事】佐藤ひろみ、井上公雄

## 鶴川探鳥会に参加して

9. 9. 7 蒲 澤 鉄太郎

9月7日鶴川探鳥会に参加したところ、担当幹事の樋口さんから突然感想文を書いて欲しいと依頼され、はたと困りましたが何とかなるだろうと引き受けました。

今年4月旭川での二次就職も終え札幌に参りまして、家内共々すぐ当会に入会させていただきました。今後ともよろしく願い申し上げます。

旭川では旭川野鳥の会に入っていましたが、内陸のためシギ類の観察が出来なく、なんとかシギ類の観察をしたいと思っていたところ、3年前の8月末に初めて北海道ウォッチングガイドで当会の探鳥会が鶴川で行われる

のを知り参加させてもらいました。

そのときメダイチドリ、アオアシシギ等数種類のシギを観察させてもらいその後の探鳥に大変勉強になりました。今年春につづき2回目の鵜川となり、シギ・チドリ類に期待して参加しました。

あいにく天候が悪く参加者は10数人と少なめ、担当幹事の樋口さんの挨拶のころには、ほつりほつりと雨が落ちてきましたが、そこはベテランの皆さん、用意周到に出かけました。

牧場の入口付近でツバメ、カワラヒワ、見事赤茶色に毛変わりしたノビタキ、牧場内ではすぐヒバリ等を観察出来ましたが、シギ・チドリ類はなかなか見つからず河口近くでようやくアオアシシギ、トウネンが近くで観察出来ました。他にチュウヒ、ミサゴ、ハヤブサ等の「猛禽」類も観察することができました。

河口付近は海釣りの人が多く出ており、野鳥観察の条件はあまりよくありませんでしたが、鳥合わせをしたところ26種とまずまずの成果でした。

また牧場の入口近くの湿地には秋の草花の濃いピンクのアザミ、エゾミソハギ、ツリガネニンジンが咲いており目を楽しませてくれました。

砂地では、ウンランが一面に見事な黄色の花を咲かせており、楽しい一日を過ごさせて戴きました。

幹事さんご苦労様でした。これからもよろしくお願ひ申し上げます。

〒063 札幌市西区西町北13-2-3-108

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、ミサゴ、トビ、チュウヒ、ハヤブサ、オシドリ、カルガモ、アオアシシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上26種

【参加者】赤沢正一、小沢典夫、小野盛市、蒲澤鉄太郎・則子、木村与吉、小堀煌治、佐々木 裕・政子、富川 徹、長谷川稔、樋口孝城・陽子、広木朋子、藤谷節子、松井照子、柳沢信雄、山下 茂、山田良造 以上19名

【担当幹事】富川 徹、樋口孝城

## 宮島沼にて

9.10.12 鈴木英子

うす寒い曇り空の下、自慢じゃないですが何の予備知識も持たず宮島沼にやってきました。すでに顔なじみの皆さんとご挨拶をして、沼へと近づくと、彼方の対岸近くに水鳥たちが。

「マガモ、コガモ、あつ、シジュウカラだ。」

「へえ、シジュウカラがいるんだ。じゃあ、ゴジュウカラもいるかな。でもよく対岸の木にいるのがみえるなあ。」  
「なに、シジュウカラガン。ガンノ！」

なにせ森林公園の松川の池や大沢の池しか知らなく、水鳥たちに会うのは三回目くらいで、つい身近なシジュウカラのことを思ったのでした。次に出てきたのは、「キンクロハジロ」これは金黒羽白か、ウンこれも変、本を見て襟黒羽白、これで納得しました。やれやれカタカナではわかりません。さて気を取り直しおてツルシギに参りましょう。こちらは私たちを見て、見てとでもいうように岸边近くに舞い降りてきてくれました。嘴の下部と足がオレンジ色なので、お腹の白さとの対比があざやかで、いつまでも眺めていてもあきないほどでした。そうしているうちにオグロシギも一羽姿を見せてくれました。

又、突然水鳥たちが飛び立ち、何かと見れば、やはりオジロワシが現れたからでした。お互い生きるために一生懸命なのですね。

とにかく私にとってはなにかも珍しく、ずうずうしく皆さんのフィールドスコープをのぞかせていただいて、「カイツブリ」といわれて「フムフム、ウンウン」とうなずき人形（というのがあればですが）になった半日でした。又、峰延中学校の先生と生徒さんたちも参加され、若々しい黄色い声があちらこちらであがり、きっと今回は参加者の平均年齢が下がったことでしょう。私もバードウォッチングをするにつれて環境問題等に敏感になったように、この若い世代の方々がそのことについて、今から自分たちのこととして考えるようになってくれればと思います。

〒063 札幌市西区八軒1条東2丁目2-35 606

【記録された鳥】カイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ヒシクイ、マガモ、シジュウカラガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシジロガモ、ホオジロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、オグロシギ、ツルシギ、ユリカモメ、キジバト、オオジュリン、カワラヒワ、ニューナイスズメ、スズメ、ムクドリ 以上26種

【参加者】鈴木繁雄・英子、松原寛直・敏子、中正憲佑・弘子、樋口孝城・陽子、蒲澤鉄太郎・則子、内山泰男・淑子、戸津高保・以知子、栗林宏三、佐藤幸典、香川 稔、柴田一郎、高栗 勇、河崎国広、板田孝弘、山田良造、田辺 至、清水朋子、吉田慶子、太田信夫、小沢典夫、広木朋子、富樫雅美、大槻政洋、高橋明日香、内田恵理、斉藤孝顕、森谷亞美、朝倉清司、佐藤ひろみ 以上36名

【担当幹事】山田良造、栗林宏三

## 紅葉の美しい雨の野幌森林公園

— 探鳥会に参加して —

9.10.19 広木 朋子

雨でも余程酷くない限り探鳥会は行われると聞いておりましたが、私にとって雨降りは初めて、傘を差して双眼鏡を首に掛け、鳥にははたして会えるのか半信半疑で歩き出しました。森のケーキヤさんこと桂の甘い香りを嗅ぎながら緑の松とのコントラストが素晴らしいもみじの美しさに見とれ、白っぽい葉のコシアブラの木の名も教わり、ホウの木の実も拾い鳥に会えなくても満足、雨降りなぞ何のそのと歩いていると鳥の声が聞こえ出しました。

双眼鏡で覗くとシジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ……。鳥に会えた！一瞬心が踊りました。段々と欲が出て来ます。もっと他の鳥にもと、どんどん進んでふと振り返ると数名の人々が立ち止まってマミチャジナイがいたとの声。観てみたい！双眼鏡で追ってみました。すでに遅し、自宅近くの木の生い茂った公園に朝夕時間を決めて通ったら今月中なら会えると愛護会の先輩の方の説明を受け一安心。池の端ではカイツブリ、カモ類を望遠鏡を通して観せて頂き、元気の良いヤマゲラの声。渋いカケスの声に誘われて見返り坂まできました。

雨も上がり薄陽が差しもみじが美しい見返り美人に会え、自然の優しさ、美しさに雨の日もまた良しと満足な半日でした。

〒004 札幌市清田区北野5条1丁目9-7

〔記録された鳥〕カイツブリ、トビ、ヒイタカ、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、キンクロハジロ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、マミチャジナイ、ツグミ、キクイタダキ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、アオジ、イカル、カケス、ハシブトガラス 以上23種

〔参加者〕矢野昭二・玲子、中正憲佳・弘子、小堤、豊島、柏葉 明、森田新一郎、鈴木繁雄・英子、香川 稔、戸津高保・以知子、霜村耕介、松江道人・繁子、犬飼弘、蓮本信夫、竹中昭雄、吉田慶子、野坂英三、広木朋子、道場 優、樋口孝城、栗林宏三、井上公雄 以上26名

〔担当幹事〕道場 優、野坂英三

## 初めてのウトナイ探鳥会に参加して

9.11.9 山本 昌子

テレビ新聞等でウトナイ湖探鳥会参加無料、渡り鳥飛来とのニュースに主人に同行をお願いして初めてのウト

ナイ湖へ。いるいるハクチョウ、オナガガモ等々遠く中州あたりはカモ類？の集団。やった！！とこみあげるうれしさでいっぱいでした。でも初めての参加でしたので知らない方々ばかりなので不安でしたがとても親切にやさしく言葉をかけて下さり、双眼鏡の大きいスコープ言うんですね。「自由に見てもいいですよ。」のひと言にうれしくなりありがとうございました。私と野鳥との出会い、それは感動のひとつにつきます。野鳥の世界にすっかりとりこになって一年が過ぎました。主人の転勤で函館に一年間暮らして函館山ハイキングの帰りに「函館山ふれあいセンター」にお伺いし室内よりバードテーブルに集まる野鳥を目の前にした時の感動は今も頭の中に焼きついています。それからが大変、家の近くの公園、山、川と野鳥の動きのある場所を捜し廻り、木の枝葉も鳥に見えたり、新聞の鳥に関する記事は切り抜き、テレビ番組には線を入れる有様です。

図鑑を手に実物観察となかなか一致せず何度も確かめながら自分で捜し名前も見つけられるようになった野鳥は数えきれない程になり感動も現在進行中です。

そして珍しい野鳥に会える日を楽しみにしています。いま最も会いたい野鳥ヤマセミ、ノゴマ等々きりがあませんが夢をもって野鳥を愛する会員の皆様からいろいろ教えていただきたく仲間入りさせてもらいましたのでよろしくお願い致します。

野鳥との出会いにより、野の花草木と関心は高まるばかりです。これらの生き物が生活しやすい環境を作ることには我々人間の生活をも守ってくれることにつながると思いますので自然破壊だけはしてほしくないと思います。

〒006 札幌市手稲区西宮の沢1条3丁目226-18

〔記録された鳥〕ウミウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ヨシガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、ホジロガモ、カワアイサ、ユリカモメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、カワラヒワ、マヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ダイサギ、ハジロクロハラアジサシ 以上29種 鳥合わせ後アオジ

〔参加者〕蒲澤鉄太郎・則子、今野 弘、小堀煌治、山本俊明・昌子、清水朋子、鈴木繁雄・英子、横井澄子、戸津高保・以知子、河崎国広、柳沢信雄、杉田範男、矢野昭二・玲子、遠藤尹希子、定免 栄、広木朋子、道場 優、樋口孝城・陽子、小野盛市、長谷川嘉子、西根昭吉・紀子、永島良郎・トキ江、森田新一郎、高宮まゆみ、富田寿一、井上公雄 以上33名

〔担当幹事〕富田寿一、永島良郎

### 【藤の沢・白鳥園】

平成10年1月18日(日)

会としては年一度だけ暖かい室内からバードテーブルに集まる鳥たちを観察します。コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、シメ、カケス、等平凡な鳥ばかりですが2~3メートルという身近な距離でゆっくりと見ることが出来ます。

また小沢さんのおばあちゃんご自慢の豚汁を味わいながらの鳥談議の中から意外な情報を得ることもあります。

集合=午前10時 白鳥園(南区藤野693~1)

交通=定鉄バス(定山溪線)藤野3条2丁目下車  
藤野スキー場方向へ徒歩20分

参加費=500円(予定)

### 【野幌森林公園】平成10年2月8日(日)

冬の厳しい自然を生き抜くことは、野鳥たちにとって大きな試練に違いありません。餌を採ることが生き残るための第一条件、寒さと戦い行動する彼らの姿に、野性の逞しさが感じられます。素歩きでの参加もできますが、歩くスキー・カンジキなどがあると都合です。

集合=午前9時

大沢口駐車場入口

### 【円山公園】平成10年3月1日(日)

日中の陽ざしにも春が感じられる頃です。季節の変化に囁きはじめているものもいます。カラ類、アカゲラ、ヤマゲラ、ツグミ、ウツの他アトリ、ベニヒワ等に出会えば良いですね。昨年はベニバラウツが大きな話題になりました。今年はどうな鳥に出会えるのでしょうか。

集合=午前9時 円山公園入口付近。

地下鉄東西線円山公園下車、駅から約3分  
午前中解散予定

### 【ウトナイ湖】平成10年3月29日(日)

ガンカモ類がシベリア、カムチャツカ半島、北極圏の繁殖地へ大挙して渡るため湖や周辺に集まって来ます。オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガンの他、ヨシガモ、ホオジロガモ、ミコアイサなどいずれも美しく魅力です。

集合=午前9時40分 ウトナイ湖畔駐車場湖畔側

交通=新千歳空港発道南バス

(苫小牧行き)~ウトナイレイクランド下車

☆交通機関を利用される方は、各自でお確かめ下さい。  
☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具等をご持参下さい。  
☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。  
☆探鳥会の問い合わせは(011)851-6364 柳沢宅へ

## 鳥民だより

### ◆新年講演会、スライド映写会のお知らせ

日時 平成10年1月10日(土) 13時30分~

場所 札幌市女性センター

中央区大通西19丁目 地下鉄東西線西18丁目駅

講師 小山心平氏(会員・文筆業)

演題 「シマアオジの話」

講演に引きつづきスライド映写会を行います。

会費 500円

### ◆写真展用作品のご用意を

恒例の野鳥写真展を例年どおり開催する予定です。

場所・期間など詳細は第111号でお知らせします。出展ご希望の方は作品をご用意下さい。

### ◆平成9年度の年会費納入についてお願い

平成9年度年会費未納の方は郵便局の「払込取扱票」により、郵便振替 No.02710-18287にお振り込みください。なお、前年度からの年会費未納の方は併せてよろしくお振込み方お願いいたします。

### ◆新会員をご紹介(敬称略)

松井 照子 札幌市北区北22条西4丁目1-22

小沢 典夫 〃 北区北7条西9丁目

北海道大学 宿舍5-401

遠藤伊希子 〃 豊平区中の島1条4丁目7-1-406

長谷川富昭 滝川市空知太1丁目3-1

(株)建設維持管理センター(八木沼)法人会員

札幌市平岸1条7丁目4-31

### ◆会員住所変更のお知らせ(敬称略)

鈴木 茂也 横須賀市田浦町6-22

岡田 幹夫 虻田郡倶知安町北4条東6丁目地共8-202

広川 淳子 札幌市北区篠路9条2丁目11-6

### ◆泉 勝統氏よりお詫びと訂正(12月2日)

「野鳥だより第109号」の「石狩川水系生振・茨戸川流域の野鳥(3)」の記事のうち、8ページ・7段の「植苗でマナズルを見て来て」および「九州まで行かずにマナズル・ナベズルを観察…」は筆者の錯誤のため、お詫びして抹消いたします。

[北海道野鳥愛護会]年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287

〒060 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465